

学校の文字環境を考えよう

山梨大学教授

宮澤

正明

かつて、字形の整った毛筆風看板文字は町のいたるところで見ることができました。例えば、「たばこ」の看板や駅のホームにある「駅名プレート」などは筆路が明快で、あたかも書写の教科書に出てくる毛筆文字そのものようでした。電車を待つ小学生が、人さし指を筆にして駅名をなぞっていた光景を今でも懐かしく思い出します。その整齊な字形、勢いのある筆使いに魅せられての所作だったのでしょう。

それがいつの間にか、いずれもゴシック風のデザイン文字に変わってしまいました。以来、新製品の「たばこ」の銘柄はほとんど英語名になったような気がします。「駅名プレート」を指でなぞる光景に遭遇することもなくなりました。

また、学校の入学式、文化祭、運動会、卒業式などの行事では、毛筆で堂々と大書された立て看板が誇らしげに校門や体育館に掲げられています。それを見ただけで、緊

さて、私たちが文字を習得し字形を認識する上で欠かせないのが手習いであり目習いです。特に目習いは、物の形を認識できる年齢からその学習は始まっていると考えられます。嫌が上にも目に入ってくるさまざまな文字の姿・形は私たちの脳裏に焼き付き、やがて固有の字形として定着されていくのです。この理屈からすれば、ほとんどの時間を学校で費やす生徒たちにとって、学校の文字環境はとても大切であるといえます。

では、どのような文字環境がふさわしいのでしょうか。少し古い調査で恐縮ですが、十二三年前、小・中学生と高校生を対象にして、同一の文字を「ゴシック体、明朝体、ナール体、教科書体、毛筆の手書きで示し」、「美しいと感じるものはどれか」「好きなものはどれか」「同じように書いてみたいものはどれか」といったアンケートをとりました。

その結果、「美しい」「好き」「書いてみたい」と感じるものはいずれも圧倒的に毛筆の書き文字で、次いで教科書体があげられました。しかもどの年齢層からも同様の回答が得られました。このことから、文字の美しさや理想の姿は、まずは書き文字(風)にあつて、さらに毛筆によつて書かれたものへの憧れをもっていることがわかります。

一時代前とはいえ、今、同じ調査をしても大差ない結果が出るのではないのでしょうか。我が田に水を引くように

張感が高まり襟を正したくなるような気分になつたものです。教室や廊下などに掲示される標語や生徒名なども、毛筆書きが主流でした。今は掲示物はいつまでもなく、看板のような大きな文字さえもワープロで印字できるので、威風堂々とした毛筆による看板は姿を消しつつあります。

このように、かつて見られた整齊な毛筆風文字による看板(ロコタイプ)の毛筆文字は多くなりませんが、や手書き文字は影を潜め、町や学校にはデザイン化された文字や印字文字が氾濫しているようです。さらに、IT時代を象徴するパソコン、携帯電話の普及で、デジタル化された文字をディスプレイ上で見ることが多くなりました。この二十年ほどの間に、私たちの文字環境は書き文字から乖離する方向で多様化、複雑化しながら形成されつつあるといえるでしょう。文字は書かれるものから、デザインされるもの、印刷されるもの、そしてデジタル化されるものへと急速に変容しつつあるのです。

で恐縮ですが、おそらく現在の生徒たちも潜在的には毛筆による文字に憧れをもっているものと推測されます。生徒たちのこれらの願望やニーズは文字環境はもとより、書写指導の指針としなくてはならないでしょう。したがって、学校の文字環境は書き文字を多くし、できれば毛筆の書き文字が理想といふことになります。

そこで、中学校書写の基礎・基本の学習を踏まえながら、文字環境と書写の学習を直結させた方法をいくつかあげてみました。

校内の掲示物で、古いもの、目立たないもの、書き直しが必要なものを調査し、書き直して掲示する。
校内に必要なと思われる掲示物や標語などを考え、適切な用具・用材で書いて掲示する。

校内の碑や銅板などに記された校歌や学校名などの拓本を採り、これを教材として練習し、完成作品を「校内の文字の散歩道」などとして紹介、展示する。

これらは、生徒が書いた文字で学校の文字環境を作る方法です。生徒の自主的な活動によつて校内の文字環境が整えられる、まさに生きた書写の学習と言えるのではないのでしょうか。

